

ほっ。とエピソード

vol.2 善意は人のためならず

今回ご紹介させて頂くのは、塗装業の老舗、福島市のH社さんです。

H社さんの、毎年仕事始めの恒例行事になりつつあるのが「街の落書き消し」。かかる費用は全て自社の負担という、完全なボランティア。それでも、従業員の皆さんは喜んで落書きを消されるそうです。この「落書き消し」、いったいどんな意味があるのでしょうか。

一九八〇年代のニューヨークでは、年に六〇万件以上の重犯罪事件が起きており、とても治安がひどい状態でした。そこで考えたのが「地下鉄の車両の落書きを全て消すこと」。局員は疑問を抱き猛反発したそうですが、実際に行った結果、地下鉄の重犯罪事件が数年間でなんと約七五％も激減したそうです。

この福島も、もっと明るく、子供たちが安心して住める町にしたい。そんな思いを持っていた社長はある日、「落書きを消すボランティアをやってみよう」と社員に提案を持ちかけました。突然そんなことを言われて、社員が戸惑わないはずはありません。お金を出して落書きを消すなんて、そんな偽善ぶったようなこと会社の負担になるだけで何の意味があるのか…確かに負担はあるかもしれない。それでもいいからやってみよう。ご自身も初めての経験に不安を抱えながら、社長はなんとかボランティアの企画を進めました。

実際にボランティアをやろうとすると、障害だ

らけでした。落書きされている新幹線の高架橋の所有者・管理者のご協力を頂くのもひと苦労でした。ただで落書きを消したいなんて怪しい、と疑いの目で見られてしまったり…。それでも、落書きを消すのはとにかくいいことなんだ。そう信じて迎えた、二〇〇九年の仕事初めの日。当日は、県内のメディアが何社も取材にきていました。スタッフは一生懸命に落書き消しをしました。そこには、お金を頂いて仕事をする時とは全く異なる感動がありました。

後日、地域の人々からとても大きな反響がありました。H社はすばらしい会社だ、と人々の間で話題になったのです。幼い娘・息子から「お父さんのお仕事ってすごいんだね!」と言われ、自分の仕事が誇りあるものと感じられて嬉しかった、と語る従業員も現れました。社長「ご自身にも変化が起きました。社長がお風呂に入っていると、それまであまり仲の良くなかった先代(お父様)が突然「塗装の腕はまだ負けないが、やっていることではお前に負ける。私は初めて息子を尊敬した」と語ったそうです。

このボランティアをきっかけにスタッフの意識が変わり、社内の空気がどんどんプラスに変化していきました。そしてなんと、業績まで上がっていました。社長にとって塗装は目的ではなく、手段へと変わりつつあります。壁を塗装してきれいにするのではなく、塗装で心をきれいにするのだ。

ボランティアは、誰でも初めは「してあげる」つもりのもですが、そのことによって学びがあり、成長「させて頂く」のは、実は自分たちなのかもしれないですね。

あの会社でもできるなら、と真似をして年間に落書き消しをする塗装店さんが現れるかもしれませんが、実は、これも狙いのひとつ。もし少しずつ落書き消しが広まれば、日本中の会社が落書きを消すようになったら、日本中の落書きが消え、犯罪が減って、世の中が明るくなることでしょう！

大きな目標を言ったとしても、実際にできることは目の前のこと。「日本を良くするんだ!」例えばこんな大きな話にも、あなたの一歩が大きな力を与えるのかもしれない。

採用と教育

代表 半田 真仁



広島県出身。商事会社に在職中、日本キャリア開発協会認証のキャリアカウンセラー試験に合格、精神保健福祉士の資格も得た。2年間、福島県の若者自立相談員、就職サポートセンター特別職業相談員を務め、その後「採用と教育」を設立。組織活性化アドバイザーとして、多くの医療・福祉施設の活性化に携わっている。

◆URL <http://www.saiyoutokyoku.com/>